

私は、大学生の頃から、何となく映画を見るのが好きになって、今は月に2回の映画会もさせてもらっています。私が映画を面白く感じるようになったきっかけは、スーパーマンの映画の2作目。スーパーマンと同じ星から悪党3人が地球に来て、湖の上に降りたところです。魚釣りに来ていた人が、天から人間が降りてきて、湖の上を歩いているので、びっくりした表情をしました。これは、イエス様が弟子たちの乗った舟まで、水の上を歩いて行ったことを暗示させるような気がしたからです。

どうも映画というのは、私たちがそれまでに知っていること、経験していることを、別の角度からもう一度体験させて、ワクワクさせるようなところがあります。私が神学校を出て働き始めた頃には、バック・トゥ・ザ・フューチャーという映画ができて、その後、2作目3作目と続くと、同じ場面をシリーズで再現させるので、これと似た場面を前の映画で見たなあ、と私は、ワクワクして見てしまいます。そして、聖書も同じような出来事を読者に体験させようとする工夫を感じるのです。本来なら先週読むはずだった、パンを増やす話もモーセやエリシャの奇跡が背景にあるのです。

さて、今日の旧約聖書は、神様の命令に背いて、船に乗って別の方向へ旅をしていた、預言者のヨナの話です。命令に逆らったヨナに、神様が嵐を起こして反省させます。ヨナは「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」と言って、ヨナは乗っていた船から海に投げ出されます。そして、大きな魚に飲み込まれるのですが、今日の所は、その時の言葉です。ヨナ書の4節から7節の途中までには、水の中でもがき、苦しんでいる人間の姿が描かれています。

6節には「大水がわたしを襲って喉に達する。深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく。」とあります。

これは海での出来事というより、鉄砲水など、水の恐ろしさを日ごろ感じている、ユダヤ人の生活が、暗に語られているように思えるのです。どうもユダヤ人にとって、水というのは、飲み水は命を保つのに必要なのですが、海とか湖は、命を失うような恐ろしい所という印象があるようです。そして、水のことが聖書のあちこちに出てきます。どうも神様はその水を支配されるようなイメージが聖書にはあります。

たとえば、詩編77編20節で、「あなたの道は海の中にあり あなたの通られる道は大水の中にある。あなたの踏み行かれる跡を知る者はない。」

ヨブ記9章8節「神は自ら天を広げ、海の高波を踏み砕かれる。」

イザヤ書43章2節 これは神様が言われる言葉で

「水の中を通るときも、私はあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。」

シラ書24章5～6節「ひとりでわたしは天空を巡り歩き、地下の海の深みを歩き回った。」

私は以前、フィリピンの神話を訳したことがありますが、ある話では、男の神様は陸に住んでいて、女の神様は海の底に住んでいる。ところが朝になると女の神様は、海面まで昇って来て、イルカをお供にして、優雅に海の上を歩く、というのが出てくるんですね。

まあ、その話では、陸の男の神様と、海の女の神様が、それぞれ自分の風や雲や水を支配している力を相手に見せているうちに、相手の大切なものを傷つけたりして、お互いの力は、協力して良いことに使いましょう、ということになるのですが、水の上を女神が歩く、というのは、やはり、水を支配している、神様なら当然のことと思えるような話です。

今日の福音書で、イエス様が水の上を歩いた、というのは、8章に出てくる、嵐を静める話同様に、イエス様は、自然を支配する神様なんだ、ということが述べられているように思います。

そして、ヨナが呑みこまれた魚というのは、神様が人間であるヨナを救うための道具で、これはクリスチャンの群れである教会を指している、と感じられます。

ヨナは、3節で「苦難の中で、わたしが叫ぶと 主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求める」とわたしの声を聞いてくださった。」と言っています。

これは、そのまま、今日の福音書にも当てはまります。

今日の話の直前は、先週読むはずだった、5000人の人を5つのパンと2匹の魚で養った奇跡物語でした。ヨハネによる福音書などを見ると、奇跡を目撃した大勢の人が、イエス様を自分たちの王にしようとしたことが、紹介されていますが、そんな熱狂的な雰囲気避けるかのように、イエス様は山へ祈りに行かれ、弟子たちには、人びとから離れて、ガリラヤ湖の反対側に向かわそうとするわけです。

この話で書き手が言いたいのは、イエス様と別れて、自分たちで舟を漕いでどうしようもなくなった時、山の上から、水の上を歩いて、イエス様が助けに来てくださった、という風に考えたことではないか。

ヨナが呑みこまれた魚とか弟子たちの乗った舟とかには、教会のイメージがあって、イエス様が山に退かれたのに対して、弟子たちの舟が嵐の湖の中にある、というのは、イエス様が十字架に架かった後で復活し天に昇ったのちの、この世に残された弟子たちの教会。大変な迫害を受けて、嵐の中にある教会を指しているのではないかと、思われるのです。

イエス様が天に帰られたあと、教会はいろんな悩みの中にあるのですが、イエス様は、不可能と思われるような湖の上に現れて、「安心しなさい、わたしだ。恐れることはない。」と言われたのです。そうすると、舟は助かるし、弟子のペトロまで水の上を歩いたりするんです。

弱い人間の集まりである教会は、嵐の中にある舟のように、方向を見失うことがしばしばです。自分たちの経験だけを頼りに生きているなら、いつのまにか、世間の荒波に押し流されてしまうかもしれません。しかし、教会が、そして私たちひとりひとりが、「安心しなさい、わたしだ。恐れることはない。」あるいは、クリスマスの似たメッセージですが、「恐れるな。私はあなたと共にいる、インマヌエル」という確信を持つなら、ペトロが水の上を歩いたように、神様の示される道を勇気を持って歩み出せるのではないのでしょうか。」教会が、もっと御言葉に聞き、それに信頼することの大切さを教えているのが、今日の、水の上を歩く奇跡の内実のように私には思えるのです。